

王維「宋進馬哀辭」小考

後藤 秋 正

—
後漢末期に文体として確立したと考えられる哀辭は、もともと誄とは異なつて成人の死者を対象とせず、夭逝者を対象として哀悼の意を捧げる韻文の一種であつた。それが唐代以降、次第に誄との区別を失つてゆく。明の吳訥（一三七二—一四五七）の『文章弁体』は、韓愈（七六八—八二四）と柳宗元（七七三—八一九）について、「或曰誄辭、或曰哀辭、而名不同。」（或いは誄辭と曰い、或いは哀辭と曰いて、名同しからず。）と指摘する。確かに韓愈の「歐陽生哀辭」の対象となつた歐陽詹は、享年四十余、柳宗元の「楊氏子承之哀辭」も成人を対象としている。しかし、吳訥は言及しないが、唐代においては王維（六九九—七五九）にも「宋進馬哀辭」がある。かつてこの哀辭について、以下のように述べたことがあつた。^{〔1〕}

唐代には王維の「宋進馬哀辭」（『王右丞集』卷二七）がある。宋璟の子である宋進馬の年齢は不詳だが、この哀辭には「往來を識らず、眼中に吾が兒を見ず」、「朱戸を闢いて華軒を望めば、斯の子の門に候つかと意う」の句があるので、年少者を対象としたものと考えられる。ところが拙論を発表したあとで、陳鉄民『王維集校注』（中華書局、一九九七。以下、『校注』と略称）が出版された。『校注』には、「宋進馬哀辭」についても詳細な注が施されており、これによつて撰述の対象が確認できるなど、拙論の指摘には哀辭の引用部分の理解も含めて、誤認があることに気づかされた。そこで『校注』などを参照しつつ、改めて「宋進馬哀辭」を取りあげ、この哀辭の特質について考察を加えることとした。

『校注』は、宋進馬なる人物に関する資料として、一九五二年に西安南郊の新開門村で出土した西安碑林現蔵の陳章甫撰「唐故殿中省進馬宋応墓誌銘」⁽²⁾を引いている。撰者の太常博士陳章甫についての記事は両「唐書」には見えず、『元和姓纂』卷三には、「太常博士陳章甫、江陵人。」と言う。『全唐文』卷三百七十三の小伝には、「章甫、開元中進士。」とのみあつて、「与吏部孫員外書」「亳州糾曹庠壁記」「梅先生碑」の三篇を載せる。このうち「与吏部孫員外書」には、「僕一臥嵩邱二十餘載。」（僕一たび嵩邱に臥すること二十余載。）と言うから、進士登第以前には中岳嵩山にいたらしい。なお、高適には、今は亡佚してしまつた陳章甫撰の「史興碑」を見て作つた詩「同觀陳十六史興碑並序」があつて、その序文には、「楚人陳章甫繼毛詩而作史興碑、遠自周末、迨乎隋季、善惡不隱、蓋國風之流。」（楚人陳章甫毛詩を繼ぎて史興碑を作り、遠く周末より、隋季に^{およ}迫る、善惡隱さざるは、蓋し國風の流れなり。）と言つてゐるし、さらには趙明誠『金石錄』卷七に、「唐七祖堂碑、陳章甫撰、胡霽然行書、天寶十載四月。」とあるように、「唐七祖堂碑」も撰しているから、彼には碑文撰述の才能

のあることが当時認められていたのであらう。

さて、王維が哀辭を撰述した背景を知つておくために、この墓誌銘の概略を見ておこう。墓誌銘の部分は一行二十字で全十九行。冒頭には「唐故殿中省進馬宋公墓誌銘并序太常博士陳章甫撰」とある。ただし拓片の写真版では、最終行の銘文の前半は摩滅が甚だしくて判読できない⁽³⁾。

まず、宋進馬は、名は応、字は用之。卒したのは玄宗の天寶十四載（七五五）四月八日のことである。享年十九というから、生年は開元二十五年（七三七）ということになる。祖先は広平（河北省鶴沢県）の人。宋応は幼少時から才能を発揮したらしい。序文には常套的な表現ではあるが、「鵬雛學飛、豫章初辨。見者驚異、知非常兒。」（鵬雛にして飛ぶことを学び、豫章にして初めて^{わか}弁つ。見る者は驚異し、常兒に非ざるを知る。）と言う。曾祖父の敬は博平郡堂邑県（山東省冠県）の尉、祖父の均は臨淮郡（江蘇省盱眙県）の太守であつた。父の昱は朝議大夫・中書舍人であつたが、宋応が六歳であつた天寶元年（七四二）に、監察御史から桂陽（広東省連県）の尉に貶謫された。家族とともに父の任地に行つた宋応はここで病氣になり、彼は快癒したが、身代わりになることを祈願した母の李夫人は亡くな

った。その後、父は大理評事・攝監察御史として中央に復帰するが、その帰途に、巴硤^{（4）}で暴風に遭って乗船が破損し、「父子四人」と帰葬する李夫人の神柩は辛うじて助かったという。宋応は二度にわたって死地を脱したことになる。宋応が殿中省進馬の地位に就いたのは死の前年のことである。進馬という官職については、『新唐書』卷四十七、百官志二、殿中省の条に、

進馬五人、正七品上。掌大陳設。戎服執鞭、居立仗馬之左、視馬進退。天寶八載、罷南衙立仗馬、省進馬。十二載復置、乾元後又省、大曆十四年復。

進馬五人、正七品上。大陳設を掌る。戎服して鞭を執り、仗馬の左に居立し、馬の進退を視る。天寶八載、南衙に仗馬を立つるを罷め、進馬を省く。十二載 復た置き、乾元の後 又省く。大曆十四年復す。

と言う。儀仗を掌る官であって実質的な権限はない。宋応が咸寧県（陝西省西安市）延興門外の龍首郷にある墓所に埋葬されたのは、亡くなった月の十一日のことであつた。墓誌には「權塋」とあるから、父の宋昱にはいずれば祖先の墳墓の地である広平に帰葬する意図があつたのであろう。宋応は穀熟県（河南省商丘県）の尉であつた茫陽の盧齊曾の女を娶つており、一女子が残された。墓誌には、父

の悲哀を述べて、「舍人感此艱辛之情、載傷存沒之苦、惜其德比芳草、貌如瓊枝、言念斯人、哭殆過禮。」（舍人此の艱辛の情に感じ、載^{すなわ}ち存没の苦を傷み、其の徳の芳草に比し、貌の瓊枝の如きを惜しむ、言に斯の人を念い、哭すること殆ど^{ほとん}礼に過ぐ。）と言っている。

ここで父の宋昱の事跡についても確認しておこう。彼の事跡は両『唐書』に断片的に見られるのみである。『旧唐書』卷一百六、楊国忠伝には次のように言う。

國忠之黨翰林學士張漸・竇華、中書舍人宋昱、吏部郎中鄭昂、憑國忠之勢、招來賂遺、車馬盈門、財貨山積。及國忠敗、皆坐誅滅。其斲喪王室、俱一時之沴氣焉。

国忠の党の翰林學士張漸・竇華、中書舍人宋昱、吏部郎中鄭昂は、国忠の勢に憑り、賂遺を招来し、車馬は門に盈ち、財貨は山積す。国忠の敗るるに及び、皆な坐して誅滅せらる。其の王室を斲喪するは、俱に一時の沴氣なり。

この記事によると、宋昱は楊国忠の一族であつたために国忠の死後に誅殺されたことになっているが、『新唐書』卷二百六の楊国忠伝によれば、彼の死は他の人々のそれとは若干事情を異にしている。

其黨翰林學士張漸、竇華、中書舍人宋昱、吏部郎中鄭

昂、俱走山谷、民爭其貲、富埒國忠。昱戀貲產、竊入都、爲亂兵所殺、餘坐誅。

其の党の翰林字士張斬・寶華、中書舍人宋昱、吏部郎中鄭昂は、俱に山谷に走げ、民其の貲を争うに、富は國忠に埒し。昱貲産を恋いて、窃かに都に入り、乱兵の殺す所と爲り、余も坐して誅せらる。

自宅に残した、賄賂によつて蓄積された莫大な財産に拘泥して引き返したために乱兵に殺されたというのである。

これらの記述によれば、宋昱は清廉潔白な人物としては描かれず、権勢に媚びる物欲過多な人物とされている。いずれにしても宋昱が死んだのは、玄宗が蜀へ逃れる途中、馬嵬で楊忠が殺された天宝十五載（七五六）六月からそれほど経っていない時期であることは確かである。つまり、王維が「宋進馬哀辞」を撰述したのは、宋昱が乱兵に殺される前年のことになる。王維が宋昱から哀辞の撰述を委嘱されたのは、中書省の舍人であつた宋昱と天宝十四載に門下省の給事中であつた王維との、詔勅をめぐる職務上の關係に由来するものであろうが、直接的な交流を示す資料は何一つ残されていない。

さて、『校注』はこの墓誌銘によつて、宋進馬を朝議大夫・中書舍人であつた宋昱の子である宋応であるとみなし

ている。これはもとより妥当な見解であらう。

三

ついで、「宋進馬哀辞」の序文を見よう。

宋進馬者、中書舍人宋公之子也。公無弟兄、子一而已。文則有種、德亦惟肖。忽疾倏逝、醫不及視。宋公哀之、他人悲之。故爲詞曰、

宋進馬は、中書舍人宋公の子なり。公弟兄無く、子一なるのみ。文は則ち種有り。徳も亦惟れ肖なり。忽ち疾みて倏ち逝く、医も視るに及ばず。宋公は之を哀しみ、他人も之を悲しむ。故に詞を爲りて曰く、

墓誌にも宋応が重病にかかったが一命をとりとめたことが見えていた。以下適宜、換韻している箇所ごとに区切つて本文を見てゆく。

青春涉夏兮、衆木藹以繁陰、連金華與玉堂兮、宮闈鬱其沈沈。百官竝入兮、何語笑之啞啞、君獨靜默以傷心。春に背きて夏に涉り、衆木は藹として以て繁陰あり、金華と玉堂とを連れ、宮闈は鬱として其れ沈沈たり。百官並び入り、何ぞ語笑の啞啞たる、君独り静默して以て傷心す。

「背……涉……」という表現は『文選』に何例か見えて

おり、潘岳「閑居賦」にも、「若乃背冬涉春、陰謝陽施。」

(乃ち冬に背きて春に涉り、陰謝りて陽施すが若し。)とある。

「金華」と「玉堂」は、漢の長安の未央宮にあった宮殿の

名。班固「西都賦」に、「金華・玉堂、白虎・麒麟、區宇

若茲、不可殫論。」(金華・玉堂、白虎・麒麟、区宇茲の若

く、殫くは論するべからず。)と言う。「啞啞」は、談笑する

声。『周易』震卦に、「震、亨。……笑言啞啞。」(震は、亨

る。……笑言啞啞たり。)とある。「静黙」は、声をたてず

にひっそりとしていること。『楚辭』九章・惜誦に、

退靜默而莫余知兮 退きて静黙すれば余を知る莫く

進號呼又莫吾聞 進みて号呼すれども又吾を聞く莫し

とある。この段落は、夏がおとずれて緑濃くなった朝廷

で、他の百官とは異なり、悲しみに沈みながら職務に従う

宋昱の姿を描出する。

草王言兮不得辭、裁悲滅思兮少時。僕夫命駕兮、出閭

闔歷通達。

王言を草して辞するを得ず、悲しみを裁え思いを滅ず

ること少時。僕夫に駕を命じ、閭闔より出でて通達を歴

たり。

「王言」は、君主の言葉。ここは詔勅の類を言う。『書

經』商書・咸有一德に、「大哉王言。」(大いなるかな王の

言。)と言う。唐代の中書舍人の職務に関しては『唐六典』

卷九に、「中書舍人六人、正五品上。」とあり、次のように

説明されている。

掌侍奉進奏、參議表章。凡詔旨及璽書・冊命、皆按典

故起草進畫。

進奏に侍奉し、表章に參議するを掌る。凡そ詔旨及び

璽書・冊命、皆な典故を按じて起草・進畫す。

「閭闔」は、漢の建章宮の正門の名だが、ここは借りて

長安の宮城の正門を言う。「通達」は、四方に通ずる大通

り。謝靈運「君子有所思行」に、

密親麗華苑 密親 華苑を麗しくし

軒麗飾通達 軒麗 通達を飾る

と見える。この段落は、宋昱が悲しみを抑えつつ、一日の

職務を終えて帰宅するべく都大路に出たことを述べる。

陌上人兮如故、識不識兮往來、眼中不見兮吾兒、驂紫

騮兮從青驪。低光垂彩兮、怳不知其所之。

陌上の人は故の如く、識るものと識らざるものと往來

するに、眼中に吾が兒を見ず、紫騮を驂として青驪に従

う。低光 彩りを垂るるも、怳として其の之く所を知ら

ず。

「紫騮」は、赤栗毛の駿馬。例えば楊炯の樂府「紫騮馬」

に、

俠客重周遊 俠客 周遊を重んじ

金鞭控紫駟 金鞭 紫駟を控く

とある。「青驪」は、黒毛の馬。『楚辭』招魂の「乱」に、

「青驪結駟兮齊千乘。」（青驪 駟を結んで千乗を齊しくす。）

とある。「低光」について『校注』は、王嘉『拾遺記』卷

六などを典拠として「荷花」を指すと言ひ、また、謝朓

「雜詠三首 燭」の、

暖色輕帷裏 暖色 輕帷の裏

低光照寶琴 低光 宝琴を照らす

の句を引いて、「燭光」を指す用例もあることを指摘し、

さらに、「此処亦可能指夕陽。」と言ふ。しかしこの句は、

「光を低れ彩りを垂る」と読んで、興馬の豪華な装飾のさ

まを言うともとれる。興馬が華麗であればあるほど悲哀は

際立つのである。「怳」は、茫然自失するさま。例えば江

淹「別賦」に、「居人愁臥、怳若有亡。」（居人は愁え臥し、

怳として亡う有るが若し。）と見える。ここからは明らかに、

朝廷から退出した後の父宋昱の立場に立った、失意の

描写が続く。

關朱戸兮望華軒、意斯子兮候門、忽思瘞兮城南、心齋

亂兮重昏。

朱戸を關きて華軒を望めば、斯の子の門に候つかと意
い、忽ち城南に瘞めんことを思ひて、心は齋亂して重昏
す。

「朱戸」は、天子が下賜する朱門のある邸宅。潘勗「冊

魏公九錫文」に、「錫君朱戸以居。」（君に朱戸を錫い以て居

らしむ。）と言ふ。「華軒」は、邸宅の欄干。例えば潘岳

「為賈謐作贈陸機」へ其の八へに、

優游省闈 省闈に優游し

珥筆華軒 筆を華軒に珥む

とある。子が父を待つという表現は、陶淵明「歸去來兮

辭」に、「僮僕歡迎、稚子候門」（僮僕は歡迎え、稚子は

門に候つ）と言ふのを踏まえる。「城南」は、埋葬の地。

詳細な場所は墓誌に見えていた。「齋亂」は、心が乱れる

こと。『楚辭』九弁に、

慷慨絶兮不得 慷慨して絶えんとして得ず

中齋亂兮迷惑 中は齋亂して迷惑す

とある。「重昏」は、重ねて乱れること。これも『楚辭』

九章・涉江に、

余將重道而不豫 余 將に道を重して予せざらんとす

固將重昏而終身 固に將に重昏して身を終えんとす

とある。この段落は、我が子の死が未だ信じられず、埋葬

の期日を目前にして心がいつそう乱れることを言う。

仰訴天之不仁兮、家惟一身、身止一子、何胤嗣之不繁、就單渺而又死。將清白兮遺誰、問詩禮兮已矣。哀從中兮不可勝、豈暇料餘年兮復幾。

仰いで天の不仁なるを訴えんとす、家には惟だ一身、身には止だ一子のみなるに、何ぞ胤嗣の繁んならざる、就ち單渺にして又死せり。清白を將て誰にか遺らん、詩・礼を問うこと已みぬ。哀しみ中よりして勝うべからず、豈に暇りに余年を料ること復た幾ならん。

「一身」とは墓誌にあつたように、宋昱が妻の李夫人に先立たれたことを言う。「單渺」は、単少と同じく少ないことだが、ここは宋応がただ一人の男子であり、かつ若年であつたことを言うのである。「清白」は、清廉潔白な心。『楚辭』に二例が見えており、離騷には、

伏清白以死直兮 清白に伏して以て直に死するは

固前聖之所厚 固に前聖の厚くする所なり

とある。「遺誰」の一句は、「古詩十九首」へ其の六の、

采之欲遺誰 之を采りて誰にか遺らんと欲する

所思在遠道 思う所は遠道に在り

の句を踏まえるのであろう。「問詩・礼」の句は、『論語』の季氏篇に見える、孔子がその子の鯉に、「詩・礼」を学

んだかと問いかけた故事を踏まえる。ただし『校注』が、「鯉先於孔子而卒（参見『論語・先進』）、情況正与宋公之子同、故曰「已矣。」と指摘するように、孔鯉が父より先に亡くなったことをも念頭に置いた表現であろう。「哀從中」と類似する表現は、曹操「短歌行」のほか、潘岳「悼亡詩三首」へ其の二にも、

韞胸安能已 胸を韞すること安くんぞ能く已めん
悲懷從中起 悲懷 中より起こる

と見えている。この段落は、自身が晩年にさしかかったのにもかかわらず、妻に続いて後嗣をも失った悲しみを述べる。

日黯黯兮頽暉、鳥翩翩兮疾飛。遯窮天兮不返、疑有日兮來歸。靜言思兮永絕、復驚叫兮沾衣。

日は黯黯として暉を頽とし、鳥は翩翩として疾く飛ぶ。遯かに天を窮めて返らざるに、日有りて来り帰らんかと疑う。静かに言に永く絶えたるを思い、復た驚き叫びて衣を沾す。

「黯黯」は、暗いさま。陳琳「遊覽二首」へ其の二に、
蕭蕭山谷風 蕭蕭たり山谷の風
黯黯天路陰 黯黯たり天路の陰
とあり、江淹「哀千里賦」にも、

水黠黠兮蓮葉動 水黠黠として蓮葉動き

山蒼蒼兮樹色紅 山蒼蒼として樹色紅なり

とある。「窮天」は、天の果てに至ること。鮑照「凌煙樓銘」の序に、「重樹窮天、通原盡日。」（重樹 天を窮め、通原 日を尽くす。）とある。「静言思」は、『詩經』邶風・柏舟、及び衛風・氓に同様の表現があり、前者は、

静言思之 静かに言に之を思ひ
寤寐有標 寤めて辨つこと標たる有り

とある。この段落は、夕暮れには鳥たちでさえねぐらに帰るのだから、息子も帰つて来るのではないかと思うもの、ふと現実にもどつて悲嘆に暮れることを言う。

客有弔之者曰、觀末始兮有物、同委蛻兮胡悲。且延陵兮未至、況西河兮不知。學無生兮庶可、幸能聽于吾師。客に之を弔う者有りて曰く、未だ始めより物有らずと観、委蛻に同じとして胡ぞ悲しまん。且つ延陵すら未だ至らず、況んや西河すら知らざるをや。無生を学べば可なるに庶からん、幸わくは能く吾が師に聴かんことをと。

「觀末始兮有物」の句は、『莊子』庚桑楚篇の次の一節を踏まえる。

古之人、其知有所至矣。惡乎至。有以爲未始有物者。

至矣盡矣、弗可以加矣。其次以爲有物矣、將以生爲喪也、以死爲反也、是以分已。

古の人、其の知 至る所有り。惡くにか至る。以て未だ始めより物有らずと爲す者有り。至れり尽くせり、以て加うべからず。其の次は以て物有りと爲す、將に生を以て喪うと爲し、死を以て反ると爲さんとす、是を以て分かるのみ。

類似の文章は齊物論篇と則陽篇にも見えており、いずれも生と死は同一のものであり、すべては無に通じていることを言う。「委蛻」は、蛇や昆虫などが脱皮した脱け殻。これも『莊子』知北遊篇に、次のように見えている。

舜曰、吾身非吾有也、孰有之哉。曰、是天地之委形也。生非汝有、是天地之委和也。性命非汝有、是天地之委順也。孫子非汝有、是天地之委蛻也。

舜曰く、吾が身 吾が有に非ざれば、孰か之を有するやと。曰く、是れ天地の委形なり。生は汝の有に非ず、是れ天地の委和なり。性命は汝の有に非ず、是れ天地の委順なり。孫子は汝の有に非ず、是れ天地の委蛻なりと。

孫や子は天地の脱け殻であり、これを自己の所有にはできないと言うのである。「延陵」の句は、『礼記』檀弓下に

見える呉の季札の故事を踏まえる。季札が斉からの帰途、その長子を失い、嬴・博の間（山東省泰山県付近）に葬った。簡素な墓を作り、泣きながら周囲を三周すると、「骨肉歸復于土命也。若魂氣則無不之也、無不之也。」（骨肉の土に帰復するは命なり。魂氣の若きは則ち之にかざる無きなり、之にかざる無きなりと。）と言つて立ち去つたという。ここは『校注』が、「此処反用其意、謂延陵季子處理其子之喪、未能達到最高境界。」と言うように、季札ですら我が子の死に動揺し、『莊子』に言う最高の境地には至っていないことを言う。「西河」の句は、同じく『礼記』檀弓上に見える故事を踏まえる。子夏がその子を亡くしたとき、悲嘆の余り失明した。弔問に訪れた曾子は子夏が過度に私情におぼれたことを怒り、次のようにたしなめたという。

吾與女事夫子於洙泗之間、退而老於西河之上、使西河之民疑女於夫子。爾罪一也。……喪爾子、喪爾明。爾罪三也。

吾 女なんじと夫子に洙泗の間に事つかう、退きて西河さいがの上に老い、西河の民をして女を夫子かと疑わしむ。爾の罪の一なり。……爾の子を喪いて、爾の明を喪う。爾の罪の三なり。

「西河」は魏の地。龍門から華陰に至る黄河中流の西部

一帯。孔子没後、子夏はここに住んで学問を教授していた。「無生」は、仏教でいう生も死もない絶対の境地。この語は王維自身の五律「登弁覺寺」の尾聯に、

空居法雲外 空居す法雲の外

觀世得無生 世を觀じて無生を得たり

とあり、後の例だが白居易「贈王山人」詩の末聯にも、

不如學無生 無生を學ぶに如かず

無生即無滅 無生は即ち無滅なり

とある。『校注』は「吾師」の典拠として、『左伝』襄公三十一年の条に見える子産の、「其所善者、吾則行之、其所惡者、吾則改之、是吾師也。」（其の善しとする所の者は、吾則ち之を行い、其の惡しとする所の者は、吾則ち之を改めん、是れ吾が師なり。）という言葉を引きいている。この最終段落は、弔問客の言葉に仮託して、『莊子』『礼記』などの語を引用しながら、過度の悲哀に沈潜することなく「無生」の境地を獲得するように勧告する。あるいはこの部分は、王維の理想とする死生觀を述べたとも考えられる。

四

一読してこの哀辞からうかがわれる顕著な特徴は魏晋六朝期の作品とは異なり、『楚辞』の文体を踏襲しているこ

とである。『楚辞』には「招魂」「大招」などの篇があるから、哀辞を綴るのにふさわしい。さらに、「陌上人」以下の部分が父親に成り代わって語られている点にも注意する必要がある。完全な形で残されている初期の哀辞である曹植（一九二—二三二）の「金瓠哀辞」「行女哀辞」、これに続く潘岳（二四七—三〇〇）の「金鹿哀辞」、さらには梁の簡文帝蕭綱（五〇三—五五二）の「大同哀辞」も、すべて子を夭逝させた父親の悲哀を綴るものであった。王維はこの伝統を意識してこの哀辞を制作したと言えよう。ただし、宋昱の立場に立つてその悲哀を記述しているとはいえ、特に最終段落は、王維が宋昱に悲哀からの超越を求めているようにも読める。この点が委嘱によって撰述された哀辞の特色となっている。ではなぜ成人を対象とする誄ではなく、哀辞が制作されたのであろうか。それは宋応の享年が十九であったことと関わる。『儀礼』喪服伝は、成年に達することなくして死亡した者について、次のような区分を設けている。

年十九至十六爲長殤、十五至十二爲中殤、十一至八歲爲下殤、不滿八歲以下、皆爲無服之殤。

年十九より十六に至るを長殤と爲し、十五より十二に至るを中殤と爲し、十一より八歳に至るを下殤と爲す、

八歳に満たざる以下は、皆な無服の殤と爲す。

つまり、宋応も二十歳に満たない夭逝者の簡幀に含まれるのである。⁽¹⁵⁾ この点においては、哀辞の制作を委嘱した宋昱、もしくは委嘱された王維の側に、誄とは異なった伝統的な哀辞の性格についての認識が備わっていたことになる。冒頭でも若干述べておいたように、韓愈が「歐陽生哀辞」を献じた歐陽詹は、貞元七年（八〇二）ころ、ほぼ四十四歳で没しているし、同じく「独孤申叔哀辞」を献じた独孤申叔は、貞元十八年に没したとき、二十六歳であった。⁽¹⁶⁾ また、柳宗元が元和四・五年（八〇九・一〇）に書いたとされる「楊氏子承之哀辞」は、享年は不詳ながら、序文の冒頭に、「楊氏子承之、既冠、有成人之道。」（楊氏の子 承之、既に冠し、成人の道有り。）と述べられるように、若年であつたにせよ、明らかに成人を対象としている。一方で王維の「宋進馬哀辞」は、成人に達していない死者を対象としているとはいえ、宋応は進馬という官職に就き、かつ妻帯して一女子を儲けるといふ、現実的には成人としての条件を備えていたことも無視できない。この「宋進馬哀辞」が撰述された事実が、韓愈・柳宗元らが成人を対象とした哀辞を制作するに際して、先例と意識されたのではないだろうか。つまり、王維の「宋進馬哀辞」は、唐代に

において、哀辞と誄との区分が失われてゆく転換点に位置した作品とすることができるのである。

注

- (1) 拙論「哀辞考」(『日本中国学会報』四一、一九八九。のち『中国中世の哀傷文学』研文出版、一九九八に収録) 参照。
- (2) 王仁波主編『隋唐五代墓誌彙編 陝西卷第一冊』(天津古籍出版社、一九九一)に拓片の写真版が収録されていて、誌蓋には篆書で「大唐故宋応君墓誌銘」とある。
- (3) ただし、『全唐文補遺 第三輯』(三秦出版社、一九九六)によると、写真版では不鮮明な銘文を、以下のように示している。「龍首之原、葬蒼葱翠、于嗟玉樹兮埋此地。」(龍首の原、葬蒼として葱翠たり、于嗟 玉樹 此の地に埋む。)
- (4) この巴硤は、桂陽の北部の五嶺にあるのだろうが、位置ははっきりしない。
- (5) 「宋進馬哀辞」の序には、「予一而巳。」とあるから、宋昱には宋応のほかに、女子二人がいたのであろう。
- (6) そのほか『唐会要』巻七四、選部上、掌選善惡の条には、天寶二年(七四二)正月のこととして、「……觀察御史宋昱、左拾遺孟國朝、竝貶官。」(……觀察御史宋昱、左拾遺孟國朝、並びに貶官せらる。)という記事が見えており、墓誌の記述と符合する。

(7) 宋璟(六六三―七七三)が鳳閣(中書)舎人であつたのは、

武后朝の長安年間(七〇一―七〇四)ころであつて、最終の官は尚書右丞相であつた。しかも『新唐書』卷一二の本伝には、六人の男子があつたことが明記されている。したがつて宋進馬を宋璟の子であるとした前述の説明は誤りであつた。

- (8) 引用は「校注」によつたが、以下、宋蜀刻本『王摩詰文集』(上海古籍出版社影印、一九九四。以下、『文集』と略称する)巻一所収のものとの異同を注記しておく。
- (9) 『文集』は、「種」を「擇」に作る。
- (10) 『文集』は、「繁」を「緊」に作る。
- (11) 『文集』は、「哀」を「變」に作る。
- (12) 『文集』は、「頽」を「積」に作る。
- (13) 『文集』は、「驚」を「號」に作る。
- (14) 「校注」は、『仁王經』巻中の、「一切法性眞實空、不來不去、無生無滅。」(一切の法性は眞實の空なり、来らず去らず、生くることなく滅ぶこと無し。)の語などを典拠として挙げている。
- (15) 唐代においても一九歳以下を成人と區別する認識が継続していたことは、一九歳で亡くなった者を対象とし、それを明示する「唐故清河張氏女孀墓誌銘」「唐故長孀男女韓勒潭墓誌」があることから明らかである。拙稿「夭逝者の墓誌銘」(『中国中世の哀傷文学』所収) 参照。
- (16) 注(1) 参照。
- (17) しかしこのことは韓愈が自身の愛児の死に冷淡だつたことを示しているわけでは決してない。元和一四年(八一九)正

月、潮州刺史に左遷された父を追った、当時一二歳の病弱であった四女の擘は、二月に商州上洛県（陝西省商州市）の層峰駅で亡くなってしまふ。擘は付近の山下に殯葬されていたが、翌年、国子祭酒として呼び戻される途中、ここを通った彼は、七律「去歲自刑部侍郎以罪貶潮州刺史、乘駅赴任、其後家亦譴逐、小女道死、殯之層峰駅旁山下、蒙恩還朝過其墓、留題駅梁」を書きつけている。擘がようやく祖先の墳墓の地である河陽（河南省孟県）へ帰葬されたのは、長慶三年（八二三）一月のことである。この時に韓愈は、擘の死亡時の情況を改めて振り返り、父親としての自己の責任を追求した「祭女擘女文」を書く。彼はこれに加えて墓誌銘の一種である「女擘墳銘」（安藤信廣『漢文を読む本』三省堂国語教育叢書一〇、一九八九参照）をも書いている。この「墳銘」が事実のみを述べ、淡々とした描写に徹しているのは、前述した詩と「祭女擘女文」とをすでに書いていたからである。

（北海道教育大学）